

日本西アジア考古学会 第25回大会 発表要旨

開催日：2020年11月21日（土）～22日（日）

会場：岡山国際交流センター（オンライン）

特別セッション

「中央アナトリアの都市化—メガシティ、 キュルテペの成立の背景をさぐる—」

趣旨説明：アナトリアにおけるメガ・シティの起源

紺谷 亮一

都市文明の起源を探る上では、都市構造に関する研究が重要である。ここでは、最新のキュルテペ（Kültepe）発掘調査成果の一部を紹介し、「アナトリアにおける都市成立の背景」とは、何だったのかという糸口を探ってみたい。

キュルテペ（古代名カニシュ）は中央アナトリアにおける、青銅器時代最大級の遺跡である。1948年からの本格的な考古学調査によって、テペ（約500×600 m）には、前期青銅器時代の大公共建築群がテペ南東部、城壁の一部、環濠がテペ西端部で確認されており、前期青銅器時代のセトルメントが現況のテペとほぼ同規模であった可能性を示している。また、テペ北西部発掘区では、前期青銅器時代最初期の文化層も確認されている。さらに中期青銅器時代の大規模な宮殿（ワルシャマ宮殿）、神殿の一部も確認されている。テペ外の平地には、カールム（Karum）と呼ばれるアッシリア商人居留区が広がっており、カールムII層を中心に大量の粘土板文書が出土している。なお、GPR調査等からカールムの規模はテペを中心にして、少なくとも半径1 km四方に及ぶと考えられる。

キュルテペの南西25 km、エイジェズ山北東麓に位置するセニル・スルトゥ（Senir Sirtı）遺跡（後期銅石器～前期青銅器時代の土器を採集）では、岩盤に開けられた人為的な横穴を発見した。その内部の鉱物を蛍光X線分析の結果スズが含まれている事が判明した。これは従来、アナトリアへは、イラン方面からスズが供給されていたという通説に再考を促すものである。こうした鉱物資源の利用がキュルテペの都市化と関係していた可能性がある。

北メソポタミアでは広大な天水農耕地帯を擁する背景がメガ・シティを形成したとされている。最近の研究では、テル・ブラク（Tell Brak）は、既に前4千年紀前半に相当な規模（主丘部分40 ha、下町地区を含めると最大300 ha）に達していたとされる。これに対して、キュルテペが位置するカイセリ市はエルジェズ山（3,919 m）の麓に位置し、夏の最高気温は

40℃を超え、冬の最低気温は-20℃を下回り、積雪量も多い。このような自然条件は北メソポタミアとは大きく異なるものの、キュルテペの規模は主丘部分で20 ha、カールム部分を含めると約300 haになる。今後、キュルテペ・カールムにおける前期青銅器時代層の有無を確認する必要がある。また、後期銅石器時代に、キュルテペにおいても都市への胎動に関する現象があったのか、今後の調査が重要である。

中央アナトリアの都市化を考える

—近年のキュルテペ遺跡の発掘調査から—

フィクリ・クラックオウル

T. オズギュッチ（Özgüç）の指揮により半世紀以上にもおよんだキュルテペ-カネシュ（Kültepe Kaneš）の第1期発掘調査は、特にアッシリア・コロニー時代のセトルメントに集中して実施された。古代カネシュの遺丘での発掘は、アッシリア・コロニー時代の行政、および宗教施設を明らかにした。T. オズギュッチはさらに、遺丘上で前期青銅器時代の層位も検出している。前期青銅器時代IIIに比定される第12層と第11b層の大規模建造物と神殿はこの第1期調査で発掘された。この大規模建築物の南には、隣接して建てられた別の建築物が見つかった。この建築物はまだ完全に発掘されていないので、いわゆるメガロン建造物との層位的関係は不明である。この建築物は石の基礎の上に日干しレンガで建造され、壁は白い漆喰が施されていた。中央アナトリアでは、これと類似するプランの建築物は知られていない。エントランスのプラットフォーム、デパスやアラバスターのイドル（偶像）、土偶がこの建築物から発見されたことから、T. オズギュッチはこの建築物を神殿と考えている。

第2期の発掘調査では、第13層から別の建築複合体が新たに発見された。これは前期青銅器時代のアナトリアで最大の建築物である。この建物は2つの非対称的な区画で構成されている。区画の間には、通路に沿った小部屋が並んでいる。この建築複合体は、その規模からすると、日常的な施設とは考えにくく、公共的、あるいは行政的用途の建築物に違いない。

前期青銅器時代から既にシリアやメソポタミアとの商業的關係があったことはよく知られている。これは「戦いの王」を意味する *šar tamhari* というアッカドの叙事詩との関連を思わせる。この叙事詩は中央ア

ナトリアの強力な王国のひとつであるカネシュの重要性について記しているのだ。第13層の大規模建築物はキュルテペで近年発見されたものであるが、アナトリアの王たちがアッカド帝国の勢力に対抗しようとした時代を建築物として具現化する例の一つといえる。これまでに例のない建築プランのこの建物や、キュルテペの前期青銅器時代の他の大規模建築物は、中央アナトリアでは特異な例であり、つまり、このような行政施設を建てられるほどの強力な権力の存在を示すものである。

カイセリ県における遺跡分布動態と地域間関係

須藤 寛史

トルコ共和国カイセリ県遺跡調査プロジェクト(KAYAP)は2008-2013年に6シーズンの調査を行い、124件の考古遺跡を登録した。

踏査遺跡で採集した資料(土器)は、銅石器時代-前期青銅器時代I/II、前期青銅器時代III、中期青銅器時代、後期青銅器時代、鉄器時代-ローマ時代に分類した。この中で、銅石器時代-前期青銅器時代I/IIとした土器のうち、赤黒土器、黒色磨研土器、刻文土器、彩文土器の4種は、型式学的に銅石器時代に比定できると思われた。赤黒土器と黒色磨研土器の胎土に含まれる炭化物からC14年代を測定したところ、赤黒土器は前4千年紀前半の年代を示した。

2010年、キュルテペ(Kültepe)遺跡の発掘資料の中に、1点のフリント石刃を見つけた。幅が広く、真っ直ぐ長い形状から、「カナアン石刃」だと認められた。しかしこの石器は南東アナトリア以北での報告例はない。キュルテペ遺跡の過去の発掘資料にも同種の石器があることがわかり、2012年までの発掘資料に22点のカナアン石刃を確認できた。また、KAYAPでも3遺跡でカナアン石刃を採取している。石材の特徴から、カイセリ県のカナアン石刃は南東アナトリアからもたらされたことがわかった。カナアン石刃の流通形態と地域間関係に新たな議論を起こす資料と言える。

KAYAPの踏査遺跡は、採集した土器の分類により、それぞれの帰属時期を定めた。時期別の遺跡数を見ると、前期青銅器時代IIIに遺跡数が急増し、中期青銅器時代に遺跡数が減る。その後は鉄器時代-ローマ時代に至るまで遺跡数は増えていく。中期青銅器時代前半の中央アナトリアは、アッシリア商人が活躍し、活気に満ちていたはずである。したがって、遺跡数の減少は地域の衰退や人口の減少によるのではなく、いくつかの拠点集落に人口が集中する都市化の現象を示すのかもしれない。カッパドキア地方でもやはり中期青銅器時代に遺跡数が減少する。一方、北メソポタミアでは、都市化の時期に小規模村落遺跡が減少

し、大規模都市遺跡の規模がさらに拡大する。小村落の人口を都市遺跡が吸収したのである。

中央アナトリアの遺跡数の変化を都市化現象の一つと見るのか、もしそうだとするならば、中央アナトリアの都市化は、北メソポタミアに遅れて進行するのか。ただし、キュルテペ遺丘部での近年の発掘では、前3千年紀に大規模建築物が確認され、この頃から都市化が進んでいたことが明らかになってきている。キュルテペ遺跡北区での発掘調査で、都市化を示す層位的情報が得られることが期待される。

キュルテペ遺跡出土のいわゆる赤黒土器の動態とその評価

山口 雄治

本発表の目的は、①キュルテペ(Kültepe)遺跡北トレンチの成果概要とその意義、②赤黒磨研土器からみた中央アナトリア地域の評価について論じることにある。

中央アナトリア地域では、後期銅石器~EB(前期青銅器時代)の連続的な堆積を示す遺跡が少なく、発掘調査された遺跡は少数あるものの、調査年代が古く今日的評価に耐えうる資料がほとんどない状況が続いていた。こうした状況を打破しようと2015年よりキュルテペ遺跡において発掘調査が開始された。これまでの調査の結果、EBにおける土器群の変遷をおおよそ追えるようになった。すなわち、EBI期ではハンドメイドの第1群土器しか存在せず、赤色系と黒色系の土器がほぼ同じ頻度で出土すること、EBII期になると黒色系の土器は減少して赤色系の土器が多くなり、シリアン・ボトルといったロクロを利用した第2群土器も出土するようになること、そしてEBIII期では第1群土器はほぼ赤色系のみになり、I・II層では彩文土器が出土するようになる、というものである。こうした変遷について、本地域の基準資料となっているアリシャルホユック(Alışar Höyük)遺跡との比較を行い、その並行関係をまとめた。このように、既存編年の整理および再検討を行うことが可能となった点に大きな意義がある。

次に、EBI期において確認された赤黒磨研土器の様相をまとめた。赤黒磨研土器とは赤黒土器とも呼ばれ、土器内外面の色調が赤/黒色の明瞭なコントラストを呈す等の特徴をもった土器群である。これらはコーカサス、南東アナトリア、レヴァント地域に加え、近年では中央アナトリア地域にも分布することが明らかとなってきた。中央アナトリア地域の赤黒磨研土器は、閉塞器形では外面が黒色を呈するものの、開放器形では内面が黒色で外面が赤色を呈するAlternate Patternをとり、BC3600年頃には主体的に存在するとされる。南東アナトリア地域では同様の

特徴をもった土器が BC 3500-3400 年頃に客体的に出土する。コーカサス地域では同じ赤黒磨研土器でも特徴が異なっていることから、後期銅石器～EB 前半には中央-南東アナトリア地域の交流がうかがえた。この時期の南東アナトリアでは、アルスランテペ (Arslantepe) 遺跡にみられるように発達した行政システムや階層的に組織された集団の存在が想定されている。こうした集団と交流していた中央アナトリア地域の集団はどのような社会組織であったのか。中央アナトリア地域の歴史的評価を考える上での赤黒磨研土器のもつ重要性を提起した。

キュルテペ遺跡土器群の技術的变化と アナトリアにおける都市化過程

下釜 和也

都市化という社会経済変化は、土器という工芸生産・技術の変化と相関していたのだろうか。これに関して本発表では、キュルテペ (Kultepe) 遺跡北トレンチ出土の土器資料を対象として定量的に分析し、その予備的成果を報告した。

都市化と社会構造の複雑化に伴って、日用土器の大量生産化や技術形態的な規格化、専業生産といった変化が、土器に関わる動作連鎖の様々な局面にあらわれたはずである。そこで今回は、(1) 粘土素材の準備、(2) 成整形技法、(3) 文様装飾、(4) 土器種別の組成という観点からキュルテペ出土の土器資料を分析した。分析対象は総計 1,121 点の土器片資料である。分析の結果、(1) 下層段階では鉍物混和が優勢だが、ロクロ成整形の無文土器によって代表される土器群が出現して以降、鉍物混和が減少する傾向を示した。(2) ロクロ成整形の無文土器は X 層に初現し、それ以降では各層の土器群中、約 30% 程度と一定の比率を占めていた。一方、在地伝統の粘土紐積み上げとみられる成形技法は過半数を占め、上の新技法の土器と共存する。(3) 表面調整と土器外観に着目すると、黒色磨研土器が X 層で激減し途絶えるとともに、赤色磨研土器が構成比の大半を占める。しかし、上層では赤色磨研が減少するとともに、彩文土器群が増加する傾向を示した。(4) 出現頻度は低いものの VI-V 層以降で突如として多様な彩文土器が出現することが確認できた。

今回の分析結果によって、キュルテペ遺跡の前期青銅器時代の土器編年を第 1 期、第 2 期、第 3 期に大きく区分し、それぞれの土器相の変化を突き止めた。

前 3 千年紀初頭から同末期まで、アナトリアにおける都市化と地域間交流が進展するなかで、土器群は漸移的な変化を見せることが判明した。最大の画期は高速回転ロクロの導入である。新技術によって製作された無文精製土器は技術形態的にみてかなり均質かつ規

格的で、他の土器群とは異なる専業工房での製作を示唆する。しかし、在地系の磨研土器群と彩文土器も依然として大半を占め、両者の製作伝統が共存していた点は注目される。これは、都市化とともにロクロ技法を基盤とする生産体制へと移行していったメソポタミアの土器生産体制とは異なる様相である。キュルテペの場合、在地の土器技術伝統と外来のそれとが共存し、両者が土器の生産体制と機能的役割を違えていた可能性を示す。両伝統の違いがそれぞれの土器を製作・利用した集団の違いを表すのか (遺跡内の階層差か)、または土器の用途に関係したのかどうかは今後の検討課題である。

カイセリ平野のポテンシャル —キュルテペ成立の地理学的背景—

早川 裕式

カイセリ平野はアナトリア半島中部に位置し、主に地殻変動により形成された盆地である。東アナトリア断層系である左横ずれのエジェミシュ断層群の活動にともなう、プリアパートベイスンとして発達した。断層や火山が多数分布し、地震も多発する当地域においては、カイセリ盆地を区切る正断層群のものとみられる露頭や断層崖も発見されている。盆地の南東には、成層火山であるエルジエス山 (標高 3,917 m) があり、更新世または完新世初期までにおける火山活動は活発であった。この火山の山体は、数百万年前の先エルジエスの火山活動が、カッパドキアの奇岩群の母岩となった大規模な火砕流噴火を伴って終了した後に形成され、地域のシンボリック的存在として多数の遺跡を含む広範囲からの眺望を得ている。また、山体東部は後期更新世に大規模な山体崩壊を起こし、先エルジエスのカルデラ内の平坦地に流れ山をともなう岩屑なだれ堆積物を残している。

カイセリ盆地は、周囲をこのような山地・丘陵地に囲まれる一方、幅約 8 km、長さ約 30 km の範囲に平坦な土地が広がり、地多様性 (Geodiversity) に富む。たとえば、カイセリ盆地から北西の山地を超えたところにはクズルウルマック川が西流する一方、カイセリ盆地周辺の山地・丘陵地からはワジを含む複数の河川が流れ込み、盆地の縁辺には扇状地が形成されている。キュルテペ (Kultepe) 遺跡は北東から流入する主要河川により形成された扇状地の末端付近に位置しており、その周辺には湿地帯もみられる。盆地内の河川は緩やかであるが、何らかの誘因により河道閉塞等が起こり、盆地内の堆積環境が大きく変化した可能性もある。たとえば、2010 年の発掘調査中には、キュルテペ遺跡周辺のトレンチ調査により、地表から 4-5 m の深さをもつ泥質堆積物の下に当時の河川堆積物と橋の遺構などが発見され、キュルテペ遺跡周辺に

おける堆積環境に大きな変化があった可能性を支持している。

起伏に富むアナトリア高原に位置するカイセリ盆地に対し、隣接する文化圏である北メソポタミア地域は、より平坦で、河床勾配も低い。降水量が同程度である北メソポタミアのテル・ブラク周辺と比較すると、水系網の特徴はカイセリの方がより急峻な地形に制約されている。また、地上経路についても地形条件に拘束されたネットワークを考慮する必要があるとともに、水系を介した交易ネットワークが確立するためには、水運の技術的な課題も検討されるべきであろう。

口頭発表

ヨルダン南部、トール・ファワズ遺跡の 上部旧石器初期石器群と理化学年代

門脇 誠二・田村 亨・大森 貴之・廣瀬 允人・
須賀 永帰・木田 梨沙子・ドナルド ヘンリー

上部旧石器時代初期 (Initial Upper Paleolithic : 以下 IUP) は、中部旧石器時代から上部旧石器時代への移行における文化と集団の動態を理解する上で重要な文化期である。この発表では、南ヨルダンのカルハ山地域に位置するトール・ファワズ (Tor Fawaz) 岩陰遺跡から出土した石器群の技術形態学的分析と年代測定について報告した。それを通して、レヴァント地方における IUP の編年と文化的多様性について考察した。

分析の結果、トール・ファワズ遺跡の石器群は、同地域の IUP の遺跡であるワディ・アガル (Wadi Aghar) 遺跡の石器群と技術形態学および年代的に近いことが明らかになった。これら 2 つの IUP 石器群は、さらにボーカー・タクチト遺跡第 4 層 (Boker Tachtit Level 4) の石器群に技術形態学的・年代的に対比できる。後者の石器群は、IUP にみられる幾つかの文化変異グループの 1 つであるエミラン (Emiran) の後半期の基準となっている。トール・ファワズ遺跡とワディ・アガル遺跡における IUP 石器群の推定年代 (約 45 ka~40 ka) は、ボーカー・タクチト遺跡第 4 層やクサル・アキル (Ksar Akil) 遺跡、ウチュアズル (Üçağızlı) 遺跡の年代と一致しており、IUP 後半期の年代を確かめることができた。

ヨルダン南部には、トール・ファワズ遺跡やワディ・アガル遺跡の石器群に類似する資料として、トール・サダフ (Tor Sadaf) 遺跡とアル・アンサブ 2 (Al-Ansab 2) 遺跡出土の石器群が知られている。後者の 2 遺跡からは理化学年代が得られていないが、石器の対比から IUP 後半期と考えられる。その一方、IUP 前半期に相当する石器群は、ヨルダン南部

では今のところ見つかっていない。ヨルダン南部の乾燥地に IUP 後半期の遺跡が増加した背景として、気候の湿潤化が想定される。

また、この時期 (約 45 ka~40 ka) は、南レヴァントの地中海沿岸部からヨルダン渓谷にかけて、アハマリアン (Ahmarian) と呼ばれる文化に属する小石刃石器群が 3 遺跡で早くに出現した可能性が指摘されている。ケバラ (Kebara) 遺跡、マノット (Manot) 遺跡、ムグル・エル・ハママー (Mughr el-Hamamah) 遺跡である。この年代が正しければ、アハマリアン文化と IUP 後半の文化が同時期に存在し、レヴァント地方における文化的多様性が高かった可能性がある。

南コーカサス地方新石器時代における、梃子式押圧剥離法による黒曜石製石刃製作技術とその変異 —ギョイトペ遺跡及びハッジ・エラムハンル・ テペ遺跡資料の分析を中心に—

池山 史華・大沼 克彦・ファルハド キリエフ・
西秋 良宏

黒曜石製押圧石刃生産技術は、南コーカサス地方の新石器文化、シュラヴェリ・ショム文化を特徴づける要素の一つでありながら、技術として一様に扱われてきた。現状語られつつある当地における新石器文化の多様性を鑑みるに、この技術についても、詳細及び変異 (バリエーション) の検討が必要であると考えられる。

本発表では、当地のクラ川中流域に位置するハッジ・エラムハンル・テペ (Hacı Elamxanlı Tepe) 遺跡 (5950-5800 cal. BC) 及びギョイトペ (Göytepe) 遺跡 (5650-5460 cal. BC) における黒曜石製押圧石刃生産技術の詳細に関する予備的な検討を、石刃石核の形態及び痕跡の分析から行った。両遺跡の分析対象とした石刃石核群の一部と、ギョイトペ遺跡の大型石刃群については、フラクチャー・ウィングの分析による剥離方法同定法を応用した手法により、梃子式押圧剥離法が適用されていた可能性が示唆できている。

両遺跡出土の石刃石核群は、作業面が周回しつつ石核消費が進む円錐形と、平坦に整形された背面部と D 字形の側断面を持ち、作業面が背面に向かい単線的に進行する D 形に分類された。また、分析対象の石刃石核群には、稜線の摩耗や下端部の潰れ等がしばしば確認された。これらの痕跡が、堅固な固定具に設置された石核から、梃子式をはじめとした押圧による石刃剥離が行われた際に、固定具からの反動を受けて生じたものである可能性を確認した。加えて、上記 2 種の石刃石核形態に対応した反動痕跡群の分布パターンが見出された。具体的には、円錐形石刃石核では下端部からの反動により生じたと想定される微小剥離ないし潰れのみが確認された。一方、D 形石刃石核では、主に側面稜線上に側面側からの反動による微小剥

離や稜線摩耗、及び石核背面に背面側からの同様の痕跡が確認された。

石刃石核の形態と、それに対応するこれらの反動痕跡の分布パターンを、復元実験により製作・提示されている様々な固定具及び対応する押圧具から推定される反動痕跡の生じ方と対比した。その結果、円錐形とD形で異なる固定具（と対応する押圧具）を用いていた可能性が想定された。押圧石刃生産、特に梃子式押圧剥離法による石刃生産において、堅固な固定具と対応する押圧具は、技術の根幹を成す要素である。すなわち、想定された固定具の変異は、押圧石刃生産技術の変異の一側面を示すものであると言えるだろう。本発表の結果は、この検討を行う上での一視点を提供し得ると考える。

南コーカサス新石器時代土器の脂質分析 —土器の機能と乳利用の有無をめぐって—

宮田 佳樹・下釜 和也・堀内 晶子・宮内 信雄・
新井 才二・赤司 千恵・吉田 邦夫・
ワレ アラクバロフ・西秋 良宏・
ファルハド キリエフ

本発表の目的は、紀元前6千年紀前半（前6000～5500年頃）、南コーカサス地域最古級の農耕牧畜村落であるハッジ・エラムハンル・テペ（Hacı Elamxanlı Tepe）遺跡（前6000～5800年）とギョイトペ（Göytepe）遺跡（前5650～5450年）、周辺のダムジリ（Damjili）遺跡（新石器～中世の土器）を比較試料として用い、土器残存有機物を脂質分析することによって、土器の機能と乳利用の有無、及び食生活を復元し、当時の新石器社会の様相を描き出すことである。

ハッジ・エラムハンル・テペ遺跡（2点）、ギョイトペ遺跡（91点）、ダムジリ遺跡（7点）のおよそ100試料の分析を行った結果、紀元前5650～5550年頃に相当するギョイトペ遺跡の下層段階では、反芻動物の体脂肪が検出された。紀元前5550～5450年頃に相当する上層段階になると、反芻動物とともに非反芻動物（ブタなど）の体脂肪も検出された。つまり、土器で反芻動物を煮炊きしていることは確認できたが、反芻動物の乳の利用は確認できなかった。したがって、農耕牧畜の導入期の南コーカサス地域では、土器による乳利用は導入されていなかったと推定される。もちろん、革袋をはじめとする土器以外の別素材の容器を使って乳利用を行っていた可能性は充分考えられるが。

今後、西アジア全域で得られている土器残存脂質データと本研究結果を比較することによって、南コーカサス地域の初現期土器に関する用途復元だけでなく、西アジアの新石器時代において、土器が導入され

た背景とその機能に関する文化的差異についての議論も可能になるであろう。

アナトリアにおける授乳習慣の変化の検討

板橋 悠・ベンジャミン アーバイン・

カメライ オズデミル・ユルマズ セリム エルダル

乳児に母乳を与えている母親は排卵が抑制されるため、授乳期間は妊娠・出産間隔の制限要因となる。授乳期間が短縮すれば次の妊娠までの期間が短くなるため、生涯出産数と人口の増加に繋がるとされる。人類史上の授乳期間の短縮時期として、食糧生産や土器利用が開始された西アジアの新石器時代に注目する仮説が挙げられている。先史集団の授乳習慣を推定する方法として、人骨コラーゲンの窒素同位体分析が有効である。母乳を飲んで乳児は母親を捕食していると見なせるため、母乳を飲んで乳児は母親よりも高い窒素同位体比を示す。そして離乳を開始して母乳の比率が減ると乳児の窒素同位体比は低下して母親の値に近づいていくため、離乳時期の推定が可能である。本発表では先土器新石器時代前期の狩猟採集民遺跡ハッサンケイフ・ホユック（Hasankeyf Höyük）、先土器新石器時代後期のアシュックル・ホユック（Aşıklı Höyük）、チャヨヌ・テペシ（Çayönü Tepesi）、土器新石器時代のチャタルホユック（Çatalhöyük）、ハケミ・ウセ（Hakemi Use）、銅石器時代のチャムルベル・ターラス（Çamlıbel Tarlası）、銅石器時代後期から青銅器時代前期のイクズテペ（İkiztepe）の窒素同位体分析結果を比較し、上記の仮説を検証した。その結果、人口増加が指摘されている先土器新石器時代後期の集団では狩猟採集民と比較して授乳期間の短縮が見られなかった。土器新石器時代では、チャタルホユック集団で授乳期間の短縮が見られた一方で、ハケミ・ウセでは短縮が見られなかった。したがって、穀物やミルク、土器による調理の開始が授乳習慣を変化させ、出生率が上昇したことが新石器時代の人口増加の原因とする仮説は支持されなかった。銅石器時代のチャムルベル・ターラスは本発表の対象中でもっとも長い授乳期間を示した。一方で、銅石器時代～青銅器時代のイクズテペはシリアの青銅器時代都市集落のテル・ブラク（Tell Brak）や20世紀の伝統的な農耕集団と同程度の短い授乳期間を示している。アナトリアの集団の多くで授乳期間が短縮するのは少なくとも青銅器時代以降であると予想される。

彩文土器と銅石器時代の生活世界
—紀元前5千年紀イラン南西部における
土器生産組織と村落の変化—

三木 健裕

鈍黄色地黒彩の彩文土器はイラン南西部ファールス地方にて紀元前5千年紀初頭に受容され展開した。土器焼成窯で焼成されたこの彩文土器の出現は銅石器時代、バクーン期（約前5000–4100年）の開始として理解されている。先行研究ではこの彩文土器の生産組織は、工芸の専門化や社会の複雑化を明らかにすることを目標に、システム論的視点に立ち、工芸の専門化の指標となる変数や生産類型を判断するため研究された。本発表ではこの視点に代わり、土器生産組織を人間とモノの間の無数の関係性とみる関係論的視点から捉え直す。

土器生産組織を関係論的視点から議論するに際し、発表者はI. ホダー（Hodder）のエンタングルメント理論、J. レイヴ（Lave）とE. ウェンガー（Wenger）の実践共同体論に依拠した。両概念を基に彩文土器の土器生産組織を、様々な人間（土器づくりに関わる熟達した陶工、見習い、土器づくりに関らない村落居住者等）と様々なモノの間の関係性が絡み合い、土器づくりの知識・技能が伝達される実践共同体と捉えた。

発表者はイラン南西部ファールス地方マルヴ・ダシュト平原にあるタル・イ・ジャリA（Tall-e Jari A）遺跡I層（バクーン期初頭、前5000年）、タル・イ・ギャプ（Tall-e Gap）遺跡（バクーン中期、前4700–4500年）、タル・イ・バクーンA（Tall-e Bakun A）遺跡（バクーン後期、前4500–4300年）の3遺跡と出土土器を分析対象とした。発表者は第1に土器属性間の関係性を可視化した。第2にモノ、彩文土器づくりの共同体、他の工芸品や生業に関わる実践共同体の間の関係性を可視化した。3遺跡における可視化された関係性のパターンを比較することで、彩文土器づくりの実践共同体、ならびに人間と彩文土器の関係性がどのように変化したかを以下のように論じた。

- 1) バクーン期初頭では彩文土器の数量が少なく、彩文土器づくりの知識・技能は安定して伝達されていなかった。物質的表現を抑制することで社会的な不平等を抑える新石器時代以来の生活世界が存続していた。
- 2) バクーン中期になると彩文土器の数量が激増し、彩文土器づくりの共同体内で安定した知識・技能の伝達が確立された。その一方で熟達した陶工と見習いの関係が固定化した。
- 3) バクーン後期では卓越した施文スキルを有する陶工が出現した。彩文土器づくりの共同体は新たに登場した工芸品製作にも影響を与え、人間とモノの関係性が一層複雑化した。また彩文土器はそれ

をつくる／つかう人間とそうでない人間の間の差異を可視化させ、村落内の社会的な不平等が加速した。

前期ディルムンの未成人墓に関する予備的考察

安倍 雅史・上杉 彰紀・岡崎 健治

ディルムンは、メソポタミアの文献史料に登場する周辺国の1つであり、前2千年紀前半にメソポタミアとインダス、オマーン半島を結ぶ海上交易を独占し繁栄した王国である。現在、バハレーンが、このディルムン（Dilmun）に比定されている。ディルムンの栄華を反映するのが、バハレーンに残されている圧倒的な数の古墳である。バハレーンには、前2300年から前1700年にかけて実に7万5千基もの古墳が築造された。

この古墳のなかで、とくに興味深いのが「子持ち古墳」と呼ばれる古墳である。「子持ち古墳」とは、古墳の外壁に小古墳が1つあるいは複数付属した古墳である。

1977年から1979年にかけて、キング・ファハド高速道路建設に先立ち、サール（Saar）古墳群の一部が緊急発掘された。この調査の際に、はじめて子持ち古墳が確認された。子持ち古墳の小古墳からは人骨は出土しなかったものの、小古墳の石室の大きさから小古墳には子供が埋葬されており、子持ち古墳は、主要古墳に親、小古墳に子供を埋葬した家族墓であろうと推定された。

1980年代になると、新興住宅地の建設に伴いハマドタウン（Hamad Town）古墳群が緊急発掘されたが、この調査の際に、はじめて子持ち古墳の小古墳から子供の人骨が検出され、子持ち古墳の小古墳に子供が埋葬されていることが証明された。

その後、子持ち古墳の発掘件数も増加し、B. フローリッヒ（Frohlich）らが、子持ち古墳に関して考古学的・形質人類学的な研究を実施している。彼らの研究は、単独古墳あるいは子持ち古墳の主要古墳には16歳以上の成人が埋葬されており、子持ち古墳の小古墳には、新生児から15歳までの子供が埋葬されたことを明らかにした。しかし、一般的にディルムンの人骨は残存状態が悪く、「主要古墳に埋葬されたのは、父親だったのか、あるいは母親だったのか？」などといった基本的な疑問さえ明らかにされていない。

筆者らは、2015年からディルムンの古墳群の1つであるワーディー・アッ＝サイル（Wadi as Sail）古墳群で発掘調査を実施している。そして、2020年からは、子持ち古墳に集中して発掘を行っている。筆者たちはいままでに計5基の子持ち古墳を発掘したが、子持ち古墳は、従来、考えられていたよりもはるかに複雑なものであることがわかってきている。本発

表では、ワーディー・アッサイル古墳群における子持ち古墳の発掘調査成果を中心に紹介した。

上トラキア平野の青銅器時代編年

—前期と中期の検討を中心に—

千本 真生

ブルガリア南部を占める上トラキア平野では前期青銅器時代の編年の枠組みはおおむね整いつつあるが、続く中期青銅器時代の編年研究は遅れている。平野で唯一発掘された中期青銅器時代の集落遺跡として知られているガラボヴォ (Galabovo) 遺跡に関しても、その年代付けの解釈には議論の余地が残されていた。そこで、本稿では上トラキア平野における前・中期青銅器時代遺跡の編年の位置づけと各段階の指標的資料の特徴を明らかにすることを試みた。平野東部に位置する遺跡を分析対象とした。具体的には、前期青銅器時代に関しては、テル型集落址のデャドヴォ (Dyadovo) 遺跡、エゼロ (Ezero) 遺跡、ガラボヴォ遺跡のほかにマドレツ・グジョヴァ・モギラ (Madrets Gudzhova Mogila) 遺跡を、中期青銅器時代に関しては聖域址のビコヴォ (Bikovo) 遺跡と平地型集落址のチョコヴァ 18 (Chokova 18) 遺跡をとりあげた。また、比較資料にはトルコ・トラキア地方に位置するカンルゲチット (Kanlıgeçit) 遺跡を取り上げた。これらの遺跡から得られた試料の放射性炭素年代を検討しながら、当該期の土器資料の形態と装飾を比較した。

分析の結果、上トラキア平野では前期青銅器時代から中期青銅器時代にかけて、土器に見られる型式学的な諸要素が時期を異にして消長しながら、全体的には連続的に推移している様子を認めることができた。年代的枠組みに関しては、前期青銅器時代第一段階は 3200~2900 cal BC、第二段階は 2900~2500 cal BC、第三段階は 2500~2200 cal BC、前期青銅器時代から中期青銅器時代への移行段階は 2200~2000 cal BC、中期青銅器時代は 2000 cal BC から前 2 千年紀中葉にかけておさまった。前期青銅器時代第二段階と第三段階のあいだには 100~200 年ほどの空白があり、平野東部でセトルメント・パターンが変化していた可能性があるものの、それは在地土器文化に大きな変化を与えるものではなかったと指摘した。第三段階には、カップ類などの新器種に加えてロクロ製土器が認められたが、数としては少なかったため、ロクロ製品の多くは搬入品であったと考えた。また、後続する中期青銅器時代になるとロクロ製品は認められなくなり、ロクロ製作は現地に定着することはなかったと指摘した。最後に、前期青銅器時代第三段階と中期青銅器時代のあいだに移行段階を設定するか否かについては仮説の域をでないが、テル型集落が平野東部で放棄され

たことを考慮すると、この段階を集落変遷の点から一つの画期と捉えることができると考えた。

「Palace Ware」とアッシリア帝国

—その展開と利用のヴァリエーションに関する考察—

西山 伸一

Palace Ware (以下 PW) とは、アッシリア帝国 (前 10 世紀~7 世紀) の時代に出現する非常に薄手の精緻な胎土で作られた土器 (多くは Buff Green から Cream 色を呈する) の呼称である。しかし、土器研究の宿命でもあるのだが、その土器がどのような範疇のものを含むのかは研究者の間でも一致をみているとはいいがたい。一般的には、アッシリア帝国時代で限られたエリート層に使用された饗宴用土器であり、帝国の領土拡大と深く関係していると解釈されている。本発表では、過去の研究を踏まえ、イラク・クルディスタンのアッシリアの拠点都市ヤシン・テペ (Yasin Tepe) 遺跡から新たに出土した資料を使用し、PW の新たな側面を考察した。

そもそも PW は 1954 年に P. S. ローソン (Rawson) がこの土器がニムルド (Nimrud) 遺跡の北西宮殿で発見されたことからつけた呼称である。J. オーツ (Oates) はこの土器をさらに詳細に定義した。その後、この土器にはさまざまなヴァリエーションが含まれていることが判明したが、型式的研究以外は本格的な科学分析や考察が行われてこなかった。ところが 2015 年に A. M. W. ハント (Hunt) が彼女の博士論文を改訂した Palace Ware across the Neo-Assyrian Imperial landscape: Social Value and Semiotic Meaning を刊行し、胎土分析や中性子放射化分析 (INAA) などを導入した PW の総合的研究を提示した。彼女によれば、この土器は大きく Bowl (Form A)、Dimple Goblet (Form B)、Jar (Form C) (Beaker とともに) に分類できる。このうち Form A はアッシリアの拠点都市で行政エリート層に限り使用され、地位、権力および威信の象徴として使用されたという。しかし、PW は Form A 以外は、基本的に帝国の中心地から配布されたものではなく、むしろ各地方で生産され、その地のエリート層が帝国權威のシンボル、あるいは記号的意味をもつ物質として消費したとする。確かに PW が出土する遺跡の多くはアッシリアの王都クラスカ地方の拠点都市である。しかし、果たしてハントのいうように、その中のエリート層だけに使用されたのだろうか。

本発表では、ヤシン・テペ遺跡の発掘調査から新たに出土した PW は、以下のようなことを示唆すると結論づけた。1) この土器はザグロス山脈西山麓まで広がる。2) PW は、アッシリアの權威や威光を反映する物質の 1 つではあるが、その使用は必ずしもエ

リート層に限られておらず幅広い社会階層（特に庶民）にも使用されていたと推定できる。3) ヤシン・テペ出土のものは、2つのシナリオが想定できる。すなわち、庶民が高い技術でつくられたPWを称賛して、故人とともに埋葬したか、アッシリアの中心部で見られる埋蔵形態を模倣した結果、庶民の墓にもPWが埋葬されたかである。後者は、アッシリア文化が東部辺境にまでも浸透していたことを示すと考えられる。

イラン南部ファルス州 TB75 遺跡出土の アケメネス朝期の突帯付き大甕について

足立 拓朗

アケメネス朝ペルシアの成立と拡大は古代西アジア史研究にとって重要なテーマである。そのためには精密な遺跡の分布地図を作成し、その発展段階を考古学的に検討する必要がある。その地理的範囲は広大であるが、西アジアで長年実施されてきた発掘調査や分布調査の成果を活かして、このような研究に着手することが肝要である。しかし、実際にはアケメネス朝以前の時期であるメディア期や、アケメネス朝の前期や後期、また滅亡以後などの時期区分を出土遺物の分析で行うのは難しい。特に遺跡数の多いアケメネス朝後期とアケメネス朝以降の遺跡を出土遺物や表面採取遺物で正確に判別することが困難である。このような事実は2012年に発表された W. F. M. ヘンケルマン (Henkelman) のアケメネス朝の考古学研究を概観する論考でも述べられており、当該期の研究者の共通の課題であると思われる。

本発表では、この課題を検討するためにアケメネス朝期の前後の時期に出土する突帯付き大甕 (Ribbed Pithos) を分析する。この大甕は器高が1m以上に達する土器であり、その破片が大量に出土する。そのため、この大甕の器形による時期区分が可能になると、上記の課題を解決できる可能性がある。

このような着想はなかったため、2008年に刊行されたファルス州タンゲ・ボラギ (Tang-e Bolaghi: TB) 75 遺跡の第2層の遺物の分析において、著者は時期を「アケメネス朝後期からアケメネス朝以降」とした。タンゲ・ボラギ地域では他のアケメネス朝期の遺跡が複数調査されていたが、TB75の報告以前にそれらの成果を参照することができなかった。そのため少々古い調査だが、TB75遺跡に近接しているため、1976年にD. ストロナーク (Stronach) が報告したパザルガダエ (Pasargadae) 遺跡の調査を参考にした。

TB75遺跡の報告からほぼ10年が経過し、イタリア・イラン共同調査隊により、タンゲ・ボラギ地域のアケメネス朝期の遺跡であるTB76とTB77の成果が

2016年に報告された。また同じくイタリア・イラン共同調査隊により、ペルセポリス西 (Persepolis West) 遺跡の成果も2017年に報告された。本発表では、これらの遺跡から出土した突帯付き大甕を検討した。さらに1963年に東京大学によって報告されたタペ・スルヴァン (Tape Suruvan) 遺跡の成果に再評価を加え、突帯付大甕の形態からアケメネス朝後期とアケメネス朝以降を区別できる可能性を提示した。突帯付大甕は口縁が外屈するタイプと肥厚するタイプが存在し、前者がアケメネス朝後期に位置づけられること、また後者がアケメネス朝期以降に属する可能性が高いことを指摘した。

サーサーン朝期におけるガラス容器生産と 加飾行為の検討

—キシュ出土品を中心に—

四角 隆二・阿部 善也

3世紀前半に設立された新都市ウェフ・アルダシール出土ガラスはサーサーン・ガラス理解の基準とされてきた。しかし、5世紀半ばの洪水で衰退するため、6世紀以降のガラスに関する詳細は不明確で、サーサーン朝後期に盛行するカットガラスに関する理解には情報が不足していた。この問題を解決するため、筆者らはアシュモレアン博物館所蔵品の調査を行い、ユーフラテス川以東の西アジアにおける古代末期のガラス生産を考察した。

まず、キシュ (Kish) 出土品の器種組成は閉塞器形小型容器と開放器形容器に大別でき、他のメソポタミア都市遺跡出土品と同様の傾向を示す。カット・パターンに着目すると、メソポタミアで広範に分布する正倉院タイプ円形切子碗に加え、キシュでは上賀茂神社タイプ二重円形切子碗や沖ノ島タイプ浮出円形切子に類似する特徴の破片も見られた。またカットには、断面カマボコ形と平歯のグラインダを併用していることが推定された。

次いで、可搬型蛍光X線分析装置による分析では、上記3分類に加え、先行研究で知られている成分組成を細分する2グループを確認した。キシュで初めて確認されたこれら2群は、不純物元素の含有割合が類似しつつ含有量が増加したもので、当該遺跡における原料起源地の多様性を指摘できる。

さて、ガラス容器の生産の工程は、原料ガラスを製造する一次生産、原料ガラスを溶解し容器として成形する二次生産に大別できる。さらに成品化されたガラス容器に対して、カットや金彩などの二次的加飾が施される場合もある。以上を考慮してキシュ出土品を整理すると、高温を用いる工程に特殊性と容器製作ノウハウなどの高度化を指摘でき、キシュにおける吹ガラス生産を伺わせる。カット工程にも独自性が認められ

るが、二次的加工であるカットは容器生産とは無関係に施すことは可能で、伝統的な石材加工技術が応用可能であることを考慮すると、カット工房の操業については今後の研究に待ちたい。

ウェフ・アルダシールに基礎を置く研究では、ユーフラテス川以東の西アジアにおける吹きガラス産業は3世紀中葉に成立後、生産に大きな変化はないとされてきた。本研究の結果、5世紀以降における素材供給地の多様化、技術の高度化を確認できた。一方、カット装飾に関する検討についてはコールドワーク工房の操業が想定されるコーカサス地域の実態把握が必要である。

ガリラヤ湖東岸地域のヘレニズム都市の形成に関する一考察

—エン・ゲヴ遺跡とヒッポス遺跡を事例として—

江添 誠

イスラエル国ガリラヤ湖東岸地域はゴラン高原の裾野から湖岸まで900mほどの幅で平地が広がっており、十分な水源や実り豊かな後背地など古代ローマの都市建設の要件は満たしているにもかかわらず、沿岸部に港湾都市が建設された痕跡は見つかっていない。

本報告ではガリラヤ湖東岸に位置するエン・ゲヴ(En Gev)遺跡とハイファ大学によって発掘調査が進められているヒッポス(Hippos)遺跡の発掘成果に基づいて、エン・ゲヴ遺跡の居住終焉期とヒッポス遺跡の都市形成期の状況を精査し、ヘレニズム時代の都市形成の推移を検討するとともに、文献史料が示す歴史状況と照らし合わせて、ローマ時代以降、東岸に港湾都市が建設されなかった理由を考察してみた。

ヒッポス遺跡では、テメノス(神域)の周辺で実施された試掘の結果、前3世紀初頭に居住が始まり、前2世紀にはヘレニズムの公共建造物をもつ都市として発展していったことが遺物と遺構の出土状況から推定されている。また、都市を取り囲む市壁の建設年代に関する発掘調査によって、市壁は前2世紀末のハスモン朝のアレクサンドロス・ヤンナイオス(Alexander Jannaeus)による内戦の際に破壊されたものが、前1世紀に都市を守るための強固なものへと再建されたと考えられている。

一方、エン・ゲヴ遺跡では地表から20cm程度掘り下げるとヘレニズム時代の建物の壁が検出され始め、その石積の高さは高くても1mに満たない。壁の厚さは最も厚いところでも90cm程度で、整形された石材が用いられることはなく、自然石による石積壁である。建物の構造も強固なものではなく、ヘレニズム王朝の建築技術の影響は確認できない。住居址はハスモン朝時代以降のものは検出されず、ローマ時代の建築技術による港湾都市の整備の痕跡も確認できない。

このような状況から、アレクサンドロス・ヤンナイオスの内戦においてハスモン朝に抵抗したガリラヤ湖東岸地域の人々が前線となる沿岸部には居住ができない状況に追い込まれ、ヒッポスへと居住を移していったのではないかと推測される。これ以後も前63年のポンペイウスの東方遠征時に、ヒッポスと協同していたガダラがユダヤ人によって都市が破壊され(『ユダヤ戦記』1:155)、第1次ユダヤ戦争においてもユダヤ人による襲撃を受けていたこと(『ユダヤ戦記』2:459)をヨセフスは記している。このように前2世紀末から後1世紀末まで、ガリラヤ湖東岸地域の人々は常にユダヤ人による攻撃や略奪から身を守る必要があり、略奪されやすい沿岸部には居住せずに、ゴラン高原の頂や中腹の台地面に強固な砦となる都市を築いて生活したものと考えられる。

北シリアの墓出土土製ランプについての新知見

—脂質分析等からみた機能と用途—

津村 眞輝子・堀内 晶子・宮内 信雄・吉田 邦夫・
宮田 佳樹

本発表では、北シリア出土のランプの出土状況や残留有機物分析をもとに、実際にランプがどのように使われたのかを考察した。対象資料は古代オリエント博物館シリア考古学調査団(団長:江上波夫)が1974~80年にユーフラテス川中流域東岸(ルメイラ・ミショルフェ地域)のローマ〜ビザンツ時代の墓から発掘した土製ランプである。盗掘を免れたと推定できるE-2号墓から58点ものランプの出土があり、古代オリエント博物館に分与された30点の資料の分類分析を進めている。煤の放射性炭素年代測定では421年~537年(95.4%)という暦年較正結果が出ている。E2号墓出土ランプ8点、他の地点からの出土ランプ7点、オリーブオイルで燃焼実験を行った比較ランプ1点の残留有機物分析を行った。

E-2号墓出土で確認できたランプの火口全点に煤がついていることから、実際に火は灯された。しかし、脂肪酸を270℃以上に加熱すると生成することが知られている ω -(o-alkylphenyl)alkanoic acids (APAA)は認められなかった。より低温で生成されるalkylcyclopentyl alkanoic acid (ACPA)も数点に検出されたが、いずれも微量であった。したがって、ランプは長時間利用されなかったことが示唆された。また、出土ランプでは脂肪酸が酸化された様子がほとんどみられなかったことから、繰り返し灯されていないことも示された。油の同定にはいたっていないが、動物性脂質のバイオマーカーが検出されず、ほとんどに共通して植物の表皮細胞起源と推定されるワックス類が検出された。モミ属に含まれる成分や丁字などに含まれる香料成分が全点から検出され、香りを持つ植

物を油に浸した可能性もある。

E-2号墓は地下式横穴墓で、正方形の墓室（2.5×2.5 m）の正面、両脇、床奥に4つの棺床を持つが、ランプが多く出土した地点は墓室手前の床直（22点）と正面棺（12点）であった。被葬者によってランプの数に差が出る状況は他の墓の事例も認められている。最も多く出土した仕切り手前部分は、共有スペースとしてランプが灯された可能性もある。今後は、住居跡からの出土ランプやユーフラテス川流域の他の出土例などとの比較もしながら、墓におけるランプの利用についてさらに考察していく。

エジプト古王国時代前半期のモデル容器副葬の機能と供物儀礼の象徴的コミュニケーションシステム

竹野内 恵太

古王国時代前半期にミニチュア化した石製モデル容器が副葬品組成に導入される。この石製モデル容器の性質・機能を巡ってこれまで、①石製モデル容器セットは90前後の儀礼行為に基づく供物リスト（リストタイプA）の内容を3次元化した象徴的・儀礼的器物、②リストを反映した規格的セットではなく、単なる典型的な副葬品セットであり「経済化」した器物、という2つの見解が提示されてきた。しかしながら、第4～5王朝における宗教的变化を念頭に置くと、石製モデル容器が経済化した単なる副葬品組成とだけ捉えることは可能だろうか。よって本発表では、第4王朝から第5王朝の石製モデル容器と供物リスト間の相関関係および相互作用の経時的変化を見ていくことで、両者の成立過程を確認し、石製モデル容器の機能を議論した。

分析の結果、第4～5王朝にかけて、容器セットと供物リストの構成点数・種類はそれぞれ徐々に定数化・定型化していくとともに、明確な並行関係と相互作用があった。画期は第5王朝半ばにあり、セット構成はリストタイプAの内容に収束していく。同時期に、祠堂内で供物リストが西壁に移動することで、埋葬室における容器セットとリストが同じ軸線上に並ぶようになる。これにより、供物儀礼に際して神官や親族はリストと埋葬室に対面する視点を得ることになった。これら収束過程とリストとの位置関係が示唆するように、両者の関連性は明らかに第5王朝半ばにおいて意図的に強化されたと考えた方がよい。

第6王朝では、マスタバ墓を構成する上下施設には故人の魂である「バー」が埋葬室（棺）と祠堂間を行き来するためのコミュニケーションシステムが存在し、供物儀礼の効果を拡張する様々な仕組みや媒体がマスタバ墓に導入されていた。この仕組み・概念は第5王朝以前からすでに存在していた可能性が高く、シャフトを介した死者と生者のコミュニケーションシ

ステムが成立するよう、マスタバ墓の上下構造は設計されていた。そう考えると、石製モデル容器セットは祠堂における供物リストに基づく朗唱の儀式と供物提示を所与としたその「媒体」であったのだろう。つまり、両者を媒介するようなメディアであり、且つ供物儀礼の効果を拡張する象徴的コミュニケーションシステムの構造化した仕組みがマスタバ墓において創出されたと推測する。仮説の域を大きく出たものではないが、今後は石製モデル容器セットをマスタバ墓という葬送儀礼の装置を構成する一部として捉えたうえで分析する必要がある。

テラコッタ像とスカラベから見える ナウクラティスのエジプト人社会

李 昊天

本発表の目的は、末期王朝時代エジプトの都市ナウクラティス（Naukratis）のエジプト人社会と、そこで行われたギリシア植民者に関わる商業及び文化交流を解明することである。ナウクラティスは、前8世紀エジプトで建設された唯一のギリシア人居留地として名高い商業都市である。F. ピートリ（Petrie）の発掘によって、ナウクラティスの遺構と遺物が明らかにされはじめ、考古資料を用いた研究が展開されたが、その中心的研究テーマはギリシア語史料との照合や、ギリシア世界との経済・文化・物資をめぐる交流であった。そのため、ナウクラティスから発見されたおびただしい量のエジプト風遺物を用いたエジプト人社会に関する研究や著作はごく少数に留まっている。そこで、本発表では二種類の出土遺物を例として、現地エジプト人社会の事情と、彼（女）らとギリシア人住民らとの関係に迫りたい。

ナウクラティスの出土遺物については、近年の大英博物館による発掘調査の蓄積がある。これらの史料を基盤として、本研究は、出土遺物の分析と他地域との比較という研究方法を採用した。注目するのは、巨大男性器付きの石製彫像・テラコッタ塑像と、ナウクラティスで生産されたスカラベであり、それら遺物の意義、利用法、生産製造、流通等の面について分析を行う。その結果を、エジプトの他地域の巨大男性器付き像や、地中海沿岸に分布するギリシア人とカルタゴの諸都市から発見されたナウクラティス産スカラベの情報と比較しつつ、ナウクラティスの手工業と貿易の実態を考察する。

末期王朝時代のエジプト民間信仰と深く関わる巨大男性器付き像は、厄払い及び豊作と繋がり、当時の下層民衆のあいだで流行していた。この像の分析からは、前7世紀にはサッカラ（Saqqara）などから輸入した石製彫像を用いたナウクラティスのエジプト人たちが、価格がより低い現地で製造したテラコッタ塑

像を次第に利用するようになっていったことが読み取れる。一方で、同地で出土するスカラベの分析からは、エジプト人による巨大男性器付き像の生産だけでなく、ギリシア移民による現地での大規模なスカラベ生産も行われており、そこから地中海全域に製品が輸出され、同時代で右に出るものがないほどの規模に達していたことが示唆される。

最後に、以下の結論を提示する。先行研究ではナウクラティスの交易活動のみに注意が向けられ、手工業の発展については十分な検討が行われてこなかった。本研究によって、ナウクラティスの手工業が、エジプト本土、ギリシア世界、さらにカルタゴの諸都市に及ぶ広い地域と繋がる交易路を利用し、現地の豊富な自然資源を利用して大きな成功を収めていたことが明らかになった。

プトレマイオス朝エジプトにおける 動物崇拝の考古学的研究 —奉納用動物の遺構分析を中心に—

清水 麻里奈

本発表の目的は、プトレマイオス朝期に動物崇拝が隆盛を極めるに至ったプロセスを考古資料の側から解き明かすことである。動物崇拝に関する先行研究は動物ミイラそのものに焦点を当てており、ミイラの埋納先である施設については殆ど等閑に付してきた。しかし、これらの施設はエジプト各地に開創され、地域を超えた形態の斉一性をも有している。そこで、本発表では奉納用動物の施設に着目した3つの分析を行う。

動物崇拝に関する研究は多岐に渡り、近年では莫大な数の動物ミイラを頼りとした学際的な研究が行われている。その一方で、埋納施設の体系的な分析はD. ケスラー (Kessler) の論考にとどまる。ケスラーは、施設内の礼拝場と一对のオベリスクと献酒場からなる聖域の構造的比較を行うことで、施設に共通の構造があることを説いた。この共通性とはどのようなものか。彼の論考は施設内部の構造分析にまでは至っていないため、この説の当否については疑問が残る。

分析を始めるにあたり、エジプト各地で開創された奉納用動物の施設を集成し、地上に開創された煉瓦造り施設は倉庫型、地下に開鑿された施設は複数室型に分類した。

第一に、開創された施設の時期別と地域差を導き出した。動物埋納・納置習俗には、第26王朝、第30王朝、プトレマイオス朝期という少なくとも3回の変革期があった。なかでも、サッカラ (Saqqara) では他の地域に先立って、奉納用動物の埋納施設が第28王朝前後を境として開創されたことが見て取れる。第二に、倉庫型に該当する各部屋の床面積を抽出することで、施設規模の差を明らかにした。この結果、末期

王朝時代に使用された施設はその規模が小さく、プトレマイオス朝に使用された施設には部屋の奥行きへの伸張が達成されたことが読み取れる。第三に、出土遺物より、相対的な施設の使用時期が考察されているサッカラの猛禽類用施設に着目した分析を行った。施設に開鑿された部屋の形態に着目すると、末期王朝時代末から初期プトレマイオス朝期にかけて営まれた部屋よりも、後期プトレマイオス朝期に開鑿された部屋の方が床面積が広くなる傾向がある。また、末期王朝時代末から後期プトレマイオス朝期に至る部屋の拡張状況を通覧すると、拡張の画期は前3世紀末、すなわちプトレマイオス朝期の変質に当たる時期にあったことが知られる。

以上の分析より、プトレマイオス朝期に動物崇拝が末期王朝時代にも増して隆盛していくというプロセスを明らかにした。また、奉納用動物の施設では、末期王朝時代からプトレマイオス朝期に推移する間に部屋が拡張され、プトレマイオス朝期においてもさらに部屋の拡張の傾向があることを導き出した。

倉敷市の野崎武左衛門翁旌徳碑と日本における オベリスクの系譜

岡崎 伸哉・西本 真一

1894 (明治27) 年に岡山県倉敷市児島味野に建立された野崎武左衛門翁旌徳碑 (以下、旌徳碑と呼称) は岡山県の六口島産花崗岩で造られた古代エジプトのオベリスク型の石碑である。この旌徳碑については鈴木まどかがパリのコンコルド広場に建つラメセス2世のオベリスクとの形状の相同性を指摘しているが、一方でその根拠となる寸法値の比較までは記していない。そこで本発表では、パリのオベリスクと倉敷市の旌徳碑との寸法上の比較分析を行った。その結果、旌徳碑は全体の高さが尺貫法の完数計算で『エジプト誌』掲載のパリのオベリスクの寸法のちょうど2分の1 (23,570 mm : 11,787 mm) の比率となっていることを明らかにした。旌徳碑を設計したのは1870 (明治3) 年にフランスへと留学をした土木技師の山田寅吉である。山田が留学する前の1836 (天保7) 年にはすでにエジプトからパリのコンコルド広場にルクソール (Luxor) 神殿に建っていたラメセス2世のオベリスクが運ばれていた。鈴木はパリに留学中の山田が『エジプト誌』を閲覧しており、旌徳碑の設計において参考にしたと推測しているが、寸法分析の結果はその考察を裏付けることになる。

さらに日本には旌徳碑が建造されるより前の1881 (明治14) 年に大阪に建立された岡山県の備中産花崗岩で造られたC. J. エルメレンス (Ermerins) 記念碑や1896 (明治29) 年に岡山県総社市刑部に建立された刑部産花崗岩で造られた方谷山田先生遺蹟碑、1883

(明治 16) 年に和歌山県和歌山市善稱寺に設けられた小泉家之墓といった、旌徳碑以外の明治期に建造されたオベリスク型の石碑がある。これらすべてに明六社とその社員であり慶應義塾を創設した福沢諭吉が関わっている可能性を指摘した。福沢は 1862 (文久 2) 年にエジプトを経由して渡欧しており、フランスにも足を運んでいることから山田と同じくパリのオベリスクを見ていたと思われる。また、山田が福沢を崇拝していたとされることから日本にオベリスクが導入されたのは慶應義塾の関係者、特に福沢諭吉の近辺にい

た各界に影響を与えた知識人が関係しており、多くの場合で岡山県産の花崗岩が使われていることから岡山の土地も重要な役割であったと結論づけることができる。

今後は、主要寸法が明らかになっている C. J. エルメレンス記念碑をはじめ、日本に建つ他のオベリスクの寸法分析と、原点に立ち戻った古代エジプトのオベリスクとの比較を行い、日本が開国による文明開化で西洋化を歩む上で古代エジプトの文化にも影響を受けた足跡を追究する必要がある。